

はじめに

イラク戦争から19年

あの時、どんなふうに関争が始まったのかを伝えたい

イラク人道支援ワーカー 高遠 菜穂子

イラク戦争は、「大義なき戦争」と言われています。

アメリカがイラクを攻撃するという理由は、「大量破壊兵器を隠しているから」「独裁国家からイラク国民を救うため」などと二転三転し、明確に納得できるものは何もありませんでした。しかし、当時の日本政府は、真っ先にアメリカのイラク攻撃を支持すると表明したのです。

イラクは当時、国連の大量破壊兵器査察を受けていました。性急に武力行使を進めようとするアメリカとイギリスに対し、フランス・ドイツ・ロシアは査察を継続すべきだと主張していました。

政治家だけではありません。開戦が現実味を帯びるにつれて、数十万人規模のイラク戦争反対デモが世界各都市で起きました。日本でも若い人達を中心に、「なぜイラクを攻撃するの?」「21世紀は戦争のない世紀に!」と、各地でピースウォークが開かれたり、アメリカ大使館を囲むアピールが行われたり、かつてないほど大きなムーブメントが巻き起こりました。

しかし、イラク攻撃は強行されました。私たちは戦争を止めることができなかったのです。テレビ画面を通して見た戦火のイラクに、衝撃と落胆と絶望さえ感じてしまった人も少なくありませんでした。世界が本格的な「対テロ戦争」へ突入した瞬間でした。

民間人死者の数が膨大になっていく一方で、イラク報道は減っていきました。そして、テロはなくなるどころか世界中に拡散していき、イラクの人々は今も戦争の余波に苦しんでいます。

イラクで多くの命が奪われた後、攻撃を指揮したアメリカやイギリスは、「イラクを攻撃する理由とした情報は間違っていた」と言い出しました。数年をかけた検証も行われました。日本の自衛隊が派遣されていたサマワに軍を派遣したオランダ政府もいち早く検証し、「イラク戦争は国際法違反だった」と結論づけています。イギリスの独立検証委員会は7年の歳月をかけて機密文書を開示分析、公聴会を重ね、ブレア政権の判断を誤りだと断罪しました。アメリカでもイラク戦争に関する情報収集の失敗を認めています。

日本では、「イラク戦争検証」というものがなされたことになってはいますが、公開されたのはA4ペーパー4枚のみでした。さらに、内容はイラク攻撃に関する日本の対応は概ね間違いなかったというものでした。

私たち「イラク戦争の検証を求めるネットワーク」は、イラク戦争の本格的な検証を求めています。なぜなら、過去の誤ちに向き合い学ぶことでしか、私たちは進歩できないと思うからです。世界の市民として、私たちは誰も傷つかない世界を目指したい。そのためには、不都合な過去にも向き合うしか方法はないのだと考えているのです。戦争について学校で学ぶことはあると思いますが、私たち日本人が当事者として向き合うべき現代の戦争の一つが、イラク戦争なのです。

この本は、2021年3月20日のイラク戦争18年のイベント「イラク戦争を知らないキミたちへ」で語られた20人のイラク戦争にまつわる個人的体験とともに、テーマに関連した寄稿文や日本の若者の対談録も加えて書籍化したものです。この戦争を止めなければ！ という思いに駆られた学生や社会人、メディアやNGOの関係者、政治家、様々な立場や肩書きの人々です。日本で、アメリカで、イラクで、この世界を再び戦争の世紀にしないため、持てる力を出し尽くそうと必死に駆け抜けた人たちです。当時6歳や9歳だったイラクの若者たちもいます。大人になった彼、彼女たちは今も戦争の落した影に苦しんでいます。恐怖体験や辛い記憶は忘れることはないでしょう。「民主主義のため」と言われて育ちましたが、現実はそのとは遠くかけ離れていました。イラクで未来を掲げるのはほんの一握りの人だけです。自ら命を絶つ若者が急増したことは現代イラクの大きな社会問題の一つです。

私の個人的体験を少し書きたいと思います。私たちイラク戦争世代にとって、あの激動の日々は生き方を問われた最大級の出来事でした。私はよく「なぜ、イラクに関わり続けるのですか？」と聞かれます。私にとってイラクで活動することは最初から、それまでやってきた「海外ボランティア」ではありませんでした。9・11ニューヨーク同時多発テロからイラク攻撃までの一連の世界情勢は、一瞬たりとも目が離せない状況でしたが、当時の小泉首相が発した「米国のイラク攻撃を支持する」という言葉は、あまりにも衝撃的で、私の人生を大きく変えてしまいました。すでにボランティア最優先の「第二の人生」を歩み始めていましたが、さらに強く「生き方」を問われた気がしました。この戦争に加担した日本人としての責任を痛感したのです。

フリーで現地入りした後は、戦闘地域の病院からのリクエストに応じてバグダッドから医薬品を運ぶことを繰り返していました。現場はいつも想像を超える状況でした。死傷者の傍で慟哭する家族たち。物資のないなかで奮闘する医療者たち。爆弾で身体の一部を吹き飛ばされた人たちの長く辛いその後。深い深い心の傷。激しく環境を汚染する戦争がもたらす健康被害も尋常ではありませんでした。深刻な先天性欠損症を持って産まれた新生児。長くは生きられないと宣告された赤ちゃんの体温を感じれば、胸が締め付けられるような思いがしました。

私が戦場イラクで感じたことはそれだけではありません。空爆や爆弾で炎が燃え盛るのを見るとき、あるいは虐殺や内戦が激しさを増すとき、人々の嘆きとともに地球の悲鳴を聴くような気持ちになりました。人類はテクノロジーを進歩させることはできても、いまだ確実に紛争を止める手立てを持ち得ていないのだと途方に暮れ、無力感に何度も打ちのめされました。イラク戦争からの18年で私はすっかり人間に絶望してしまっていたのです。

それでも、私は「平和主義者」でいたいと心の底から願いました。どうしたら戦争を終わらせ、紛争を予防し、誰も傷つかない世界を実現することができるのか。答えが見つからず、あきらめかけていましたが、イラクと日本の人たちと始めた教育支援活動によってやっと少し小さな希望が見え始めてきました。現在は「本と演劇で紛争を止める」をコンセプトに、紛争地における新しい平和教育のメソッドを開発中です。これが私の「第三の人生」になります。

再び間違いを繰り返さないために

日本にいと、遠い国の戦争は日本に生まれた自分には関係ないと感じるかもしれません。あるいは、自分にできることは何もないと思うかもしれません。しかし、日本に生まれた意味を考えたとき、紛争地で身動きが取れない人たちの代わりにできることがあるかもしれません。

前述しましたように、戦争は戦争を知ることでしか止められません。とりわけ、どうやって戦争が始まるのかを知ることは最も大事なことでしょう。それが、平和な未来をつくるヒントになるのだと思うのです。

戦争が始まる時はあっという間ですが、戦争を終わらせることほど難しいことはありません。戦争を始めるお金はどんどん湧いてきますが、戦争により傷ついた人たちを救うお金はいつも足りません。こんなに理不尽なことはもうやめるべきです。戦争を始めるのは人間なので、やめられるはずはあります。

この本に書かれた私たちの失敗、間違い、そして個人的イラク戦争体験が、より良い未来をつくるヒントになれば幸いです。

「イラク戦争の検証を求めるネットワーク」のご紹介

イラク戦争に関しては、米国議会やイギリスやオランダでの検証が行われるなか、日本政府は、「イラクのフセイン政権が大量破壊兵器の査察に協力しなかったため、安保理に則って行なわれた米英のイラク攻撃を日本が支持したのは間違いではなかった。支持したことで日米関係が良好になった」という、誤った当初の見解を訂正する気がありません。

イギリス政府が2009年に独立調査委員会を立ち上げて検証を開始したのに伴い、日本政府にも検証を行うよう働きかけるために、当時のイラク戦争に反対した市民や、NGO、ジャーナリストらが中心となって、「イラク戦争の検証を求めるネットワーク」が結成されました。

政府に以下の3点を求めて、シンポジウムや国会における勉強会などを行い、ロビー活動を行っています。

① イラク戦争を検証する独立の第三者委員会を政府が設立すること。同委員会が、事実関係についての情報開示や調査を行い、個人も含めた道義的・法的な責任の所在を明らかにすること。

検証すべきは、以下の3点です。

- ・「イラク戦争支持の政府判断に関する見直し」
- ・「自衛隊イラク派遣の判断の是非」
- ・「イラク復興支援への日本の関わり」

② 調査委員会による検証や、そのプロセス、最終報告などが、最大限公開され、誰にでもアクセスできるようにすること。

③ 検証による最終報告を受けての、日本政府としての見解を国内外に発表するとともに、必要とされる人道支援、被害者支援を行うこと。

また、『イラク戦争を検証するための20の論点』(2011年、合同出版)を上梓しました。

当会について詳しくはホームページをご覧ください。

<https://www.iraqwarinquiry.net/>